

開催地名	福井県越前市
開催日時	令和8年2月21日(土) 14:00 ~ 15:30
開催場所	市民プラザたけふ
語り部	犬飼 一博(愛知県名古屋市)
参加者	越前市防災士の会、防災士有資格者、自治振興会役員 自主防災組織役員、越前市危機管理課職員 67名
開催経緯	災害は全国各地で頻発している。以前は、災害は忘れた頃にやってくると言われているが、いつでもどこでも起こり得るということを前提に、備えを進めて行く必要がある。日頃から、地域の防災の最前線で活躍されている関係者に向けて今回の講演を通して、学びや気づきに繋がり、地域の避難行動の改善や防災啓発活動に役立てていただきたい。
内容	<p>【大雨から大切な命を守る！逃げ遅れゼロに向けて】</p> <p>(1) 逃げ遅れゼロに向けた取り組みとその背景</p> <p>近年、全国各地で甚大な水害により、逃げ遅れによる被害が多発している。中部地方では東海豪雨以来、広域的な大規模水害が発生していない。また、災害を経験していないことが避難の遅れに繋がっているというデータもある。その様な状況を踏まえ、デジタル技術を活用したVRによる浸水疑似体験や人気ゲームソフトを活用した啓発動画、アナログ媒体による「大雨に備えるピクトグラム」などトレンドを意識した啓発ツールを用い、防災に興味の無い人を始め、大人から子供、障がいのある人まで、より多くの人に早期避難の重要性が伝わる防災啓発に取り組んでいる。VRによる浸水疑似体験は、大雨特別警報が発表されても避難を躊躇して逃げ遅れる家族をモデルとして、逃げ遅れによる被害を疑似体験するもので、特別警報を待たずに早期避難を促すことを目的としている。</p> <p>また、特に重点を置いて取り組んでいるのが防災教育支援である。今後、社会資本整備に携わる土木系の学生を対象に防災講座を行い、過去の水害や備えを学び、避難インフルエンサーとして「守られる人から守る人へ」の意識の醸成に繋げることを目的に取り組みを始めた。その後、小・中学校・高校・大学へと拡大し、講座を受講した人数は約18,000人(令和7年12月末現在)となった。また、インクルーシブ防災の取組として、特別支援学校での防災講座や視覚障害のある方に向けた防災啓発冊子の点字版や音声版の作成も行い、中部管内の聾学校や点字図書館に寄贈している。VRや映像による浸水疑似体験は、水害の恐さが伝わり、水害を自分事として捉えるきっかけになる。特に若年層には受け入れやすく有効である。体験後には各自の避難行動を振り返ること</p>

で、効果的な学習に繋がっている。更に、より実践的な学習として、各自が、水害に備えた防災行動計画「マイ・タイムライン」の作成も行っている。

(2) 過去の水害とその教訓

防災は、過去の災害を知ることから始まる。住んでいる地域の地形や地質は変わらない。過去に水害が起きたところは、再度起きるかもしれないことを認識し、地域で起きた水害を学んで、発生し得る水害をイメージすることと当時の行動や対策を学ぶことが今の備えに繋がる。

福井県は平成 16 年の福井豪雨で足羽川が決壊、甚大な被害を受けており、越前市においても旧今立町を中心に被害が発生している。中部地方においても昭和 51 年 9 月に長良川が決壊し「9.12 豪雨（安八豪雨）」と呼ばれる甚大な被害が発生した。また、越前市では、平成 24 年の越前市東部集中豪雨や令和 4 年 8 月の線状降水帯による大雨など度重なる水害に見舞われている。近年、全国各地で台風や線状降水帯による大雨が多発しており、何時、何処で水害が発生してもおかしくない状況である。26 年前に 200 万都市名古屋を襲った都市型水害である東海豪雨も線状降水帯によるものである。近年の気象変動により洪水の発生頻度は高まると予想されている。過去の水害に学び、住んでいる地域のリスクを確認しておくことは重要である。

昭和 34 年の伊勢湾台風では全国で 5,000 人以上の命が失われたが、高潮による被害が大きく、愛知県・三重県では海拔ゼロメートル地帯という濃尾平野の地形も被害を拡大させた。福井県でも大きな被害が発生している。近年でも類似の進路を辿る台風もあり、平成 30 年の台風 21 号では関西空港が浸水するなどの被害が発生した。たまたま自分たちの住む地域で発生していないだけであり、他地域で発生した水害でも自分たちの地域でも起きるかもしれないと自分事として捉えることが大切である。

また、甚大な被害を及ぼす台風や大雨は予測が可能であり、事前に備えをして速やかに避難をすることで大切な命を守ることができる。

(3) 近年、頻発する激甚な水害と社会の変化・住んでいる地域の特徴

近年、毎年のように全国各地で水害が頻発、甚大な被害が発生し、これまで台風の被害が少なかった北日本でも発生している。また、水害による死者数も増加している。一方、社会の変化として、越前市でも人口の減少や少子高齢化が進んでいる。また、浸水被害の形態も変化しており、水害に弱い資産が増加し、洪水対策により浸水被害は減少したが浸水面積あたりの被害額は増加、ゴミの処理に長期間を要するなど新たな問題も発生している。降雨量や洪水の発生頻度の増加など気象変動の課題もある。また、私たちの住んでいる地域は、

降水量が多く、河川は急勾配で河川の水位より低い位置にあり、さらに台風の常襲地帯である。これら様々な課題解決に繋げる一つとして、A I（人工知能）を使った取り組みも進められている。

当研究所では、新たな取組として、「A I 語り部で伊勢湾台風を伝承」するものや、「A I の画像認識機能を活用した水防災クイズシステム」を開発して啓発を行っている。A I を活用した「伊勢湾台風A I 語り部」は、伊勢湾台風から 67 年が経過し当時を伝えられる人も少なくなっている中、災害体験者による口頭や当時の記録による文書での伝承では無く、A I 語り部により伝承するシステムである。

体験した子供たちからは、「本物のおじいさんと話をしているみたいでA I ってすごいなと思った。」「体験したことや実際にあったことを詳しく分かりやすく教えてくれた。」「人と話すより話しやすい。」などの好意的な意見が多く、楽しく学習出来ている様子が伺える。

（4）最後に

「自分の命は自分で守る」「大切な人の命を守る」

①事前に備えることとして、非常食や避難用品などの準備、ハザードマップで住んでいる地域の災害リスクを必ず確認すること。

②情報収集として、災害・防災情報に敏感であること、そして普段から情報収集に慣れておくこと。

③万一に備えて避難場所や避難ルートを予め決めておき、早めに避難することが大切である。それと共に、周りの人たちに「逃げて」の声掛けができる避難インフルエンサーとして、“守られる人から守れる人”になっていただければ、少しでも大切な人の命が守られると思う。

また、最近では学校と地域が連携した教育や訓練などの場に参加する機会が多くあり、地域防災力向上には、学校との連携も方策の一つである。

本日、体験していただいた浸水疑似体験V R・映像は「1minutelsecond（ワンミニット、ワンセカンド）」とタイトルを付けている。これは、1分でも1秒でも早く避難して欲しいという思いを込めて付けたタイトルである。地震はいきなり発生するが水害は発生が予測できる。水害は準備する時間があるということであり、早めの避難行動が大切な命を守ることに繋がる。今後、大雨の時期には今日のことを思い出し、大雨から大切な命を守ることに繋げていただければ幸いである。

（5）その他

	<p>講演終了後、参加の皆さんに、VRによる浸水疑似体験、AI語り部との対話体験、ペットボトルを使った防災実験を行っていただいた。</p> 
開催地より	<p>本研修会では、越前市の過去の災害事例を通じた防災啓発活動に関する知識を学ぶことができ、参加者の皆さまから大変好意的な反応をいただくことができた。市内の地域防災力を高めるためにも、このような防災知識を学び、実践へと繋げる機会を今後も継続的に設けていきたい。</p>